慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シアール・ジード氏経済原論第四版と第三版米国訳との比較
Sub Title	
Author	臼井, 鐙太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.12 (1919. 12) ,p.1651(115)- 1657(121)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19191201-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の心掩ふ可からざるものあるは實にこれが爲めなり、素より多數の同盟罷工中には玉石混交し合理的のものも時としては不合理的のものに累せられて、その眞相を沒却せらるゝものもあらむ、されどその根本理由としては、鞏固堅實にして理路井然、一世の信望を繫くに足る何物も遂にその同盟罷工宣言中に發見することなければはなり、本邦國民が目下急速力を以て、社會的に自覺しつゝあるは爭ふ可からざる事實にして殊に昨今の物價騰貴が資本家の買占、賣惜に因るにあらざるなきかを疑はしめ、資本家と共に生產に從事する勞働者の心を驅りて、資本家の利益と勞働者の利益との不一致を感得せしめたるは慥なる事實にして、又同時に資本家級と相對立する勞働者級なるものゝ抗爭觀念を强めたるも否定す可からず、勿論その中に在りて野性的なる階級的嫉視反感も交り居るに相違なく、又英國に於ける義勇兵の募集が、勞働者に哀願愁訴して辛ふして戰局を支持したる等の事例を聞知し、更に諸外國に於ける勞働運動の壯觀に魂を奪はれ、心事漸く高く又少しく平かならざるに乘して、政黨末社の徒なぞがこれを外部より煽動するものあり、かゝる煽動者中の或者は、その心術に於て投機者流と選む所なく、人の輕忽淺慮なるに附入りて、好みて狂暴の辭を列ね以て名と金とを得むとするものゝ存在するを拒む可からず、結局勞働者がこの輩の乘する所となり、妄りに業務を罷め徒らに爭ふも、遂に幾何の效果を收め得可きぞ、勞働者の爲めに切に自重自愛を望む所なり、勿論現在の產業組織とは別個の組織の下に於て、勞働者が生產高中より別に收得するの至當なるやに關しては、自ら別種の問題に屬し、本短稿のこれを能く說き盡す所にあらず、要するに目下本邦に於ける勞働問題の聲は頗る大なれ共、これ果して生活問題の上に立てる眞正の運動なりや、否、餘りに物資方面の要求にのみ傾きて、却て溫良なる人の心を失ふものなきにあらざるか、或は又これが爲めに却て他日勞働運動の爲めに禍を胎すことなきか、吾人は本邦の同盟罷工の原因に關して一個の疑問を抱かざるを得ず。（十月十三日稿）

シアール・ジード氏經濟原論第四版と第三版米國譯との比較

臼井鐙太郎

嵐の前の靜寂にも例へつべき第廿世紀初葉の所謂「武裝的平和」は、バルカンの一隅に戰亂の導火を發し、世界の列强を始め大小數十ケ國、俱に相引き相誘ひて等しく其渦中に投じ、中立を守りし邦家と雖も其の影響を蒙らざるもの、殆ど是有らざりしなり。一度戰渦治まれりと雖も、必ず大小の創痍を負はざるはあらず、勝國中に於て特に其甚しきは佛蘭西ならずんばあらず、惡戰苦鬪、幸にして、戰勝の光榮を得しと雖も、勝利は彼に取りて如何なる利益を齎らせしか。今は唯だ徒らに榮光に醉ひ、故國の花に狂はむとするの時期に在らず、殊に戰亂の結果幾多の社會問題は簇生せり、世界改造の壯圖は企てられたり。彼等は如何にして之に對せんとするか。

佛蘭西經濟學界は先きに其耆宿ルロワ・ボリユーを失ひ、航海者の指針を奪れたるが如かりしが、彼を併び稱せられたる、シャール・ジード氏の幸にして猶ほ健在なるありて、聲を大にし、筆を呵して、雜誌に著書に其の意見を發表せり

殊に彼が會心の著『經濟原論』Cours d'Economie Politique を取りて是に一大改訂を施し、世界大戰將に終りて、平和の曙光見え初めし、一千九百十八年末其の第四版の第一卷を公刊せり、

元來本書は一卷を以つて完了せしものなりしを、千三百頁に增訂して二卷となせり。彼は曰く、『前版公刊の當時より、僅かに四ヶ年を經過せるのみ、されど、其の各一ヶ年は全く一世紀と等しと云ふを得べし。又吾人は到る處に於て「戰前にありしものは一として戰後にあるべきものと同じからざるべし」と繰返さるゝを聞けり。若し之をして事實たらしめば、凡ての經濟書は悉く刷新せられざるべからず』（第四版緒言參照）と。然らば即ち增補改訂せられたる第四版と戰前即一千九百十三年に公刊せられたる第三版とを比較研究すること決して無用の擧に非ざる可し。蓋し彼が言の如くなれば其の相違を通じて、佛蘭西經濟學界の戰前戰時及び戰後の狀態を知識することを得べければなり。されど予不幸にして、原文の第三版を得ず。姑く其の米國譯を用ひて比較對照せむとす。

『天體、地球、地球に含有せらるゝ諸原素、其の表面を蔽ふ動植物及び其等の物の間に存する諸種の關係、此等は皆物性學或は自然科學と呼ばるゝ特殊なる科學の對照なり』とは、ジード氏が其の原論第三版卷頭の名句なり。然るに第四版に於ては之に先づるに更に次の如き一句を增加せり。曰く

『此の書の題名たる、數多き著書あるに關らず經濟學に關する正當なる定義未だ確定せられずと公言するは一見許し難きことなりと想像せらるべし。されど此は事實なるを奈何、然れども之れ必しも驚くに足らざるなり何となればかくの如きの事實は他の多くの科學に於ても亦然るが故也、故に或る限度を設けて經濟學特有の區域を劃するを以つて滿足すべし』と。

第三版第二頁社會學に關する註脚の第一は第四版に於て增訂あり。

第三版同頁脚註の第二は第四版に在りては第三版の The tendency to day is to divide this science 云々」と書き起せる本文中に挿入せられたり、而して第三版の註脚の最後の一節即ち There is, moreover, a further objection to defining Political Economy by wealth, namely, that the word wealth itself, as we shall see later, is not easy to define. 原文にては、D'ailleurs, il y a un autre inconvenient à définir l'Economie politique par la richesse : c'est que le mot de richesse lui-même n'est querre facile à definir, comme nous le renous ci-après. なる一節のみ第四版に於ても依然註脚として、本文外に逐はれたり。

舊版第三頁『こは即ちフランス以外の邦國に於て往々社會政策と、稱せらるゝ所以也』と、有るを『外國殊に獨逸』と訂正せり、其註釋第一の最後に、第四版第四頁には、次の一句を加へたり。即ち『此等、二人の姉妹は二個の異りたる法則の中に生存せり、而も全く同情を有せずして一は事情事件其物の法則中に生き他は、社會改革委員の間に生存せり』と

第三版第三頁第二のパラグラフ以下同節全部悉く變更せられたり。第四版の議論は次の如し『純正經濟學と社會政策との間の這般の乖離は分勞の原則のために各個書中に總て認められたり、然れども此の書籍の如き教授用の書籍に在りては此の乖離は寧ろ障害たるものなり、何となれば實際の理論と分離せしむる時は說明上の利益を害するが故也、故に吾人は屢々經濟政策と經濟原論とを共に語らむとす

經濟學なる曠野は、より容易に研究を進むるために、其の學自體を、略分せざるべからず。爰に於てか古典的なりとして取り殘されたる三分法を構成したるフランスの學者、ジアン・バプチスト・セーを生めり。三分法とは即ち生產、分配、消費なり。而して彼は根本的なる三つの疑問に應答せり、其原始的三個の疑問とは即ち第一如何にして人は富を生產するや、第二、如何なる方法に依りて吾人はその生產物を分配するや第三、其の使用法は如何にして、之に次で吾人は通例第四のもの即ち流通を加ふ、而もこは、交換に關するものを抱擁す、然れどもそは、軈て吾人が後に說明せんとするが如く單に、生產に從屬せる一の枝葉のみ、即ら交換は是生產なり、換言すれば、其の效用の增殖は、產業的行爲と異りて、交換せんとする物自身の物質的性質には、何等關係せざるものなり。

『然れども其の分類は二度、三分法となれり。何となれば、經濟學者の或者は、消費を目して空き箱に附せられたる貼紙なりとなし、之を削除したるに由れり。彼等は曰らく、「結局、貯蓄及び保存の如き所謂再生產的消費を論ずるは、彼の所謂消費の論ぜらるべき眞個の場所をば生產の章中に發見せしめ、之に關する議論をば之の章中に包有すべし。又享樂及び贈與の如き不生產的消費を論ぜんとせば、經濟學の範圍を外にして寧ろ、倫理學中に生かしむべし」と、されども、斯の如きは、吾人の採らざる所也。消費とは欲望の滿足也、而して其の結果全經濟生活の根本原因たり、且經濟活動の王冠たるべきもの也、經濟學は今日に至るまでは唯だ生產者のみを顧慮し來れり、然れども、今や、經濟舞臺に立役を演ずべく顯れ來れるものは、消費者也と、考察せざるべからざるに至れり。

『而も同時に、前述せるが如き改革は、既に價値に關する新らしき學說中には完成せらたりと云ふを得可し。而もこは、單に勞働力に賴りしにあらずして、却つて最後效用に依賴するものなり、こは即ち消費者の需要ならずや (1)

『此の分類は今日に於ては、やゝ陳腐也と考へられ、且新らしき經濟書中特に外國の諸著中に在りては、より科學的なる排列をなさんことを期し以つて他の分類法に依りて、之を變更する也、そは恐らく容易なる業なるべしと雖も、吾人は其の變更を以つて――殊に此の著の如きに於ては、特に途を失ひやすき學生諸子をして途上に彷徨せしむるの危險を冒してまでも舊來の立案を混亂するの決して有利なる道なりとは思惟せざる也、唯だ吾人は、緒言の中に或は總論の中に、欲望と價値とを加ふるの必要を信ずるのみ。

『吾人は巧妙なる組合せを有するカルタを奇麗に配列するを得るならむ、即ち吾人は常に同じく四個の異れる徵を發見すべし、而して此の經濟現象を現はす或種の方法に依りて經濟現象其自體は三ヶ又は、四ヶの大なる項目に配列せらるるに至るべし、又若し、事物の性質に依りて好く識別せられんか、此等の事物は如何なる新聞紙の項目中にても發見するを得べし、即產業問題即生產、商業問題即流通、社會問題即分配、家計問題――之に關しては、現戰爭が、廣く且案外なる重要の意義を與へんとす、――即消費、是也 (2)

註（一）此は、此の學派の先覺者の一人なる、スタニー・ジエボンスの著、經濟原論に必要不可缺の處のもの也、マーシヤル教授は其著『產業經濟』中に、『供給又は生產』の章より以前に『需要又は消費か』を論ぜり（後略）

（二）吾人は此の分類に關する面白き論爭をピヘルスン氏の名著中に發見すべし。

（其の著はスレー氏の飜譯に依りて、直ちに佛蘭西に於て、出版せられむとす）依て、吾人は此の書に於て其の最も懇切なる分類に關する批評を採用したり。ピエルソン氏は予が價値の研究より初めたるを推賞せり、されども、消費論の爲めに一項を頒ちしを不要なりとなせり、而して彼は分配を以つて生産の以前に論ずべしと評せり何となれば吾人は前者なくして後者を了解する能はざるが故也と、ここは或程度まで正當なるべしと雖もピエルソン氏に從ひて其の順序を採用したる場合には斯く言ふことを得べし。されども資本を知らざる以前に如何にして利子を了解するを得べき、産業の組織を知らざる以前に如何にして賃金勞働者を了解することを得べきと。明かに經濟學上の凡ての部門は相互に相倚賴し而して此處に此の科學の一致を明確に示すもの也。然れども結局一つのものより始めて他のものに終らざるべからざるには相違なきも生産を以て結了せしむることは正さに噴飯すべき事實なるが如き觀なきや。

以上は第四版に改載せられたる所也、第三版の文に就きて見るに、其の意大體相同じと雖も大戰に際して改められたる新版の巨細に亙れる議論は亦其眞價充分に認めらるゝ所也、曾て本塾の三邊教授が、福田小泉兩教授の所論に對してなしたる經濟學四分法の辨を讀みしと有り、教授が數千言を費して繰返されたる斯論も、ジード氏は之を僅々二頁の裡に於て遺憾なく言ひ表はせり、殊に其の枝葉に至りては之を論ずるの反つて、愚なることを明かにせり。

第四版の消費者及び生産者に對する論説は察するに彼が這回歐州の大戰亂に遭遇して、取得したる最も重要なる贈物ならずや、又第四版の緒言全體に亙りて叙述せる所一として、此の問題に觸れざるはなし。殊に第二編に收めたる其の消費及び分配に關するものゝ中には、多大なる改訂の加へられたるを見るなり。洵に彼に與へし、戰爭の影響は、甚大なるものありしなり。消費の方面よりする世界の改造は當に來るべき重要且不可抗の運動なるべし。

此脚註に於てピエルソン氏を攻擊するところ千金の力有るべし

（附記）編者が曩さに臼井氏に囑するにジード氏經濟原論第三版と第四版との比較研究を以てしたるは、單に其重要の差違數點に就きて之を論述せられんことを期したるものなるに、同氏が原著者に私淑するの深き、其改訂の全部に對して重要なる意義を認め一々之を列擧したるが爲め、其稿は實に數百枚の長編と爲り、本誌の紙幅は到底其全部を掲載し得ざるに至れり。即ち遺憾乍ら其當初の一片を掲ぐるに止めたり。聊か記して本誌が同氏の多大なる勞力に報ひ得ざりしを謝す。

（編者）

新刊紹介

カウツキイ校訂「資本論」第一卷平民版

小泉信三

Das Kapital. Kritik der politischen Oekonomie von Karl Marx. Erster Band. Buch I: Der Produktionsprozess des Kapitals. *Volksausgabe. Herausgegeben von Karl Kautsky.* Stuttgart 1914.

「資本論」平民版は一九一四年夏、纔かに歐洲大戰の破裂に先んじて世に出でたるを以て、未だ之を知らざる人多かるべし。此書はマルクス著作の版權期限盡きて、一九一四年一月一日よりその複刻自由となるを期とし、舊獨逸社會民